推薦入試・AO 入試の利用に対する文化資本の影響

遠　藤　優　太

1　問題

近代化によって地位配分の理念が身分や家柄による属性原理から個人の能力に基づく業績原理（メリトクラシー）へと移行すると、能力ある者を評価・選抜することが社会的に重要な意味を持つようになった。メリトクラシーを理念とする多くの社会においては、学校教育における業績、あるいは学歴がしばしば能力の指標とされてきた。

かつて機能主義的な理論は、教育を受けることでその出自によらず誰もが自由な社会移動を行えるようになると期待したが（Treiman 1970）、こうした期待とは裏腹に教育選抜が社会的不平等を隠蔽していることを暴露したのが葛藤理論のパラダイムであった。階級・階層ごとの文化の対立に注目する Bourdieu and Passeron（1971=1991）や Bourdieu（1979 = 1990）による文化資本論もその発展形として位置づけることができる。文化資本論は、①出身階層によって文化資本に差異があり、②親から子へ文化資本が相続され、③学校教育が文化資本を「能力」として承認することで学歴資格が付与されるというプロセスを想定している。これにより階層的な有利／不利が密輸され、選抜の結果が正当化される。そのため、③の学校教育による文化資本の承認が行われるかどうかが社会的不平等の隠蔽にとって重要な分岐点となる。

こうした視点から、海外では欧米圏を中心にこれまで数多くの研究が文化資本と学業成績や学歴との関連を明らかにしてきた（DiMaggio 1982; Roscigno and Ainsworth-Darnell 1999; De Graaf et al. 2000; Dumais 2002; Van de Werfhorst and Hofstede 2007; Jæger 2009, 2011）。しかし同時に、その影響の大きさやメカニズムには国や学校によって差があることも示されている（De Graaf 1986; Katsillis and Rubinson 1990; Farkas 1996; Crook 1997; Lareau and Horvat 1999; De Graaf et al. 2000; Sullivan 2001; Buchmann 2002; Dumais 2006a; Evans et al. 2014）。こうした文化資本効果の違いは、文化資本が作動する社会的・文化的条件、なかでも学校教育・選抜システムという制度的要因へと目を向けさせる。すでにいくつかの研究が示唆しているように（Buchmann 2002; Yamamoto and

Brinton 2010; Byun et al. 2012)、その国がどんな学校体系やカリキュラム、評価や選抜の方法をとっているかによって、文化資本が教育達成に与える影響の度合いやメカニズムは異なると考えられるからだ。

しかし、日本の文化資本の効果に関する実証研究ではこうした制度的文脈が十分に考慮されてきたとはいえない。その理由は、1つにはこれまでの実証研究の方法にある。それらの研究は学力や学歴との統計的関連をもって文化資本の実証としてきた（片岡 1998c, 1998e, 2001; Yamamoto and Brinton 2010)。しかし、それは欧米を中心とした他国の制度を前提とした方法である。日本は西洋から制度を輸入することで後発的に近代化を遂げたために教育選抜の制度と文化的背景との間に断絶が存在し、パッケージ化された知識を問う客観性の高い筆記試験が支配的であった(苅谷 1995; 竹内 [1991] 2015)。こうした歴史的・制度的文脈の違いから、文化資本論のような階層と教育に関わる欧米由来の理論を日本にそのまま適用できるかどうかは検討の余地があるとされてきた（多喜 2020)。実際、実証研究では頑健な効果が示されていないものも多く、文化資本の効果は学習態度や親の教育期待に媒介されるという報告もある（片瀬 2005; 荒牧 2011)。

もう1つは、日本の選抜制度の変化が踏まえられていないことである。たしかに従来の日本の学校教育・選抜システムにおいては、上述した近代化の経緯もあって標準化・画一化度合いの高い試験が中心的な役割を果たしていた。しかし 90 年代初頭以降、少子化を背景にさらなる高学歴化が進むと同時に、推薦入試や AO 入試といった、従来の筆記試験で測られる学力によらない選抜[1]がいっそう拡大し、今日では大学入学者のほぼ半数を占めるまでに至った（文科省 2021)。こうした本人の経歴や「個性」を測る選抜の普及による入試の多様化が新たに階層要因を混入させる可能性もある（苅谷 2008; 荒牧 2011; 松岡・中室・乾 2014; 中室・藤原・井口 2014)。

このように、文化資本がどのようなプロセスで働いているのかも選抜の在り方とその変容との関係のなかで把握する必要がある。推薦入試等の普及は、学力や階層の形成プロセスに変化をもたらすのだろうか。こうした問題から、本稿では日本の制度的文脈として高等教育入学者選抜に着目し、高校生の進路選択における推薦入試等の利用に対して文化資本が与える影響を明らかにする。特定の選抜方法の利用と文化資本との関連を示すことで、選抜システム全体の中で文化資本が進路選択にどのように関わっているのかを明らかにすることができる。推薦入試については主に中村（2011）が分析を行っているが、学力レベ

---

[1] 本稿では以下特に断りのない限り推薦入試（公募制・指定校含む）および AO 入試を「推薦入試等」と略記する。なお、2021 年度から推薦入試、AO 入試はそれぞれ「学校推薦型選抜」「総合型選抜」と名称変更されていることに留意されたい。

ルによらず文化資本が推薦入試等の多様な選抜方法の利用に関わっているかはわからない。本稿は日本で最も文化資本の働く余地のある場の１つである推薦入試等の利用における文化資本の役割を検討することで、文化資本の作動プロセスの明確化を試みるとともに、今日の日本型選抜システムの特徴の一端を明らかにする。

2　理論的背景と仮説

2-1　文化資本の実証研究と日本の制度的文脈

文化資本と教育達成との関連を検討した実証研究は海外では数多く蓄積されているが、その効果には制度的文脈によって差があることが窺える。まず効果の大きさについては、多くの国で有意な効果を持つとされる一方で、たとえばギリシャ（Katsillis and Rubinson 1990）やオーストラリア（Crook 1997）では学業成績や職業に対する文化資本の有意な効果はみられないという報告や、フランスに比べてアメリカや日本では文化資本の効果は相対的に小さく、韓国では子の文化資本が学力に負の効果を持つ（Byun et al. 2012）という報告がある。また、文化資本が働くメカニズムについても、文化資本が学校教育内で承認されているとみるのか（Bourdieu and Passeron 1977; DiMaggio 1982; Lamont and Lareau 1988; Lareau and Horvat 1999; Lareau 2003; Dumais 2006a）、文化資本が学習への態度を形成し、それが学業達成につながるとみるのか（Farkas 1996; De Graaf et al. 2000; Buchmann 2002）という２つの経路がある。これは今日、社会経済的背景の違いや国や学校レベルでの環境によって文化資本のもたらす利益には差があるといったように様々な角度から検証されている（Evans et al. 2010; Flere et al. 2010; Xu and Hampden-Thompson 2012; Evans et al. 2014; Andersen and Jæger 2015）。また、メカニズムの違いは影響する文化資本の種類にも関わっている。当初から文化資本の典型とされてきたハイブラウな芸術的資本に限らず、読書習慣などの学校の認知的技能に親和的なリテラシーが教育達成に影響することも知られている（DiMaggio 1982; De Graaf 1988; De Graaf et al. 2000; Buchmann 2002; Dumais 2002）。

このように、一口に文化資本といってもその働き方は様々である。それは、もともと文化資本が場（champ）と一体になった関係的概念であることに由来する。文化資本はそれを評価する場があって初めて機能する（Bourdieu 1979=1990 I: 177; Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 137）。同じ文化でもフランスの学校教育システムと日本の学校教育システムでは評価される度合いは違うだろうし、同じ国の中でも学校や社会経済的地位によって異なることもあるだろう。このような文化と選抜の親和性が文化資本の承認にとっ

ての鍵である。そのため、文化資本はそれが作動する文脈を考慮に入れずして論じることはできない。

しかし、日本のこれまでの文化資本研究ではその理論自体がやや独自に発展してきたこともあり（磯・竹ノ下 2018）、「文化資本の能力への変換」という過程が十分に問われてきたとはいえない[(2)]。そうしたなかで、基礎的な分析ではあるが初期にも文化資本と教育との関連を分析した例がある。宮島・田中（1984）は東京都の女子高校生を対象に、家庭の蔵書量や親の文化的活動が子の教育アスピレーションに影響していることを明らかにした。また藤田ほか（1987）や藤田ほか（1992）は、大学生を対象に文化的活動や文化的知識、言語能力といった資本が所属する大学の入試難易度と関連していることを示した。しかしそこでも指摘されているように、大学生という一定の選抜を経た者のみが対象となっているため、この分析は制約が大きいといわざるをえない。片岡（1997）は神戸市における調査から、女性にとって幼少期の文化的経験が本人の学歴を規定していることから、両親から相続した文化資本が学歴へ変換されるとした。

これらの比較的初期の研究に対し、後の研究では多変量解析を用いて社会経済的資源や学力などが統制され、文化資本が教育達成に与える独自の効果も分析された。たとえば片岡（1998e）は 1995 年の SSM 調査のデータからパス解析を行い、相続文化資本は男性の 50 歳以上コーホートでは中 3 時成績に、35 歳以上コーホートでは学歴に正の効果を持ち、女性では年齢にかかわらず正の効果を持つことを示し、文化資本効果の男女差を提示した。また片岡（1998c）は、教育達成に有利に働くのは美的・芸術的文化よりも学校の認知的能力に親和的な文化ではないかという海外の研究に倣って、文化資本をハイカルチャーのような芸術文化資本と読書習慣や蔵書数といった読書文化資本に区別した。そして同じ SSM 調査から、男女で効果に差はあるが、いずれの文化資本も中 3 時成績や高校ランク、そして学歴に影響を及ぼしていることを明らかにした。しかし逆にいえば、芸術文化資本は高校ランクや学歴には女性でしか有意な効果がなく、読書文化資本も学歴では男性のみに効果を持ち、高校ランクには影響していない。また別の分析でも、文化財は広く効果が認められるものの、幼少期の文化資本は中 3 時成績では女性のみ、高校ランクには女性の

---

(2) 実際、日本では③文化資本の承認よりもむしろ①文化資本の階層差や文化威信の測定に関する研究（橋本 1989; 岩間 1998; 片岡 1992, 1996, 1998b, 1998d, 2000, 2008; 中西 2001 など）や、②文化資本の相続に関する研究（片岡 1991, 1992, 1998a, 1998b; 吉川 1996; 白倉 1997; 松岡・中室・乾 2014 など）の多さが目立つ。海外の実証研究ではその多くが文化資本と教育達成との関連を問うものである（Yaish and Katz-Gerro 2012; Jæger and Breen 2016）のと対比すればその差はより明らかである。こうした傾向にも、従来の日本における文化資本論のリアリティのなさがあらわれているといえるだろう。

みかつ一部しか有意になっていない。学歴に対する直接効果も観察されていない（片岡 2001）。

このように、先行研究はおおむね文化資本が学歴を含めた教育上の成功と関連するとしながらも、その効果が頑健でないこともみてとれる。また、文化資本と教育達成との関連を直ちに文化資本の実証とみることもできない。1 節でも述べたように、まず日本は後発的に「追いつき追い越せ」型の近代化を遂げたという事情は無視できない[(3)]。そのなかで特定の階層文化から相対的に自律した筆記試験、高度に標準化された学校体系やカリキュラムが成立した。選抜や日常的な成績評価もほとんどが同一の筆記試験を全員が一斉に受験するタイプの学力試験によっている。たしかにこのような標準化された試験本位の能力評価においても知識や教養が文化資本として役立つ可能性は否定できないが、口述試験や教師による主観的評価が入るようなより客観化度合いの低い選抜に比べれば文化資本が「能力」として承認されるというプロセスは考えにくいだろう。特に高等教育への進学では、基礎教育科目に関する統一された入学試験の果たす役割が大きい。そのような制度的文脈を考慮せずに、文化資本が教育達成ないしアスピレーションに影響しているとみなすのは難しい。文化資本の承認過程は文化資本の効力の源泉であり、文化資本が文化資本であるための重要な条件であるにもかかわらず、これまでの分析ではその文脈が十分に分析に組み込まれてこなかった。

そこで、わずかだがそうした日本の文脈のもとで文化資本が作動するメカニズムを明らかにしようとする試みもある。文化資本が教育達成と関連するメカニズムには先述した海外の研究群にあるように主に 2 つの経路がある。1 つは文化資本がアカデミックな能力として承認されるというもともとの理論通りの過程である。もう 1 つは文化資本が学習に有利な環境・知識・財となったり、学校の文化に親近感や慣れを与えたりする（De Graaf et al. 2000）という文化資本の社会化効果に重点をおくものである。片瀬（2005）は仙台圏の高校生を対象にした 1999 年の調査から、読書文化資本が教育アスピレーションにもたらす効果は向学習態度によって媒介されることを示し、文化資本の承認メカニズムには否定的な見解を示している。また Yamamoto and Brinton（2010）は 1995 年 SSM のデータを使い、文化資本がどのように作用するかを文化資本の形態に着目して分析した。ここで文化資本の形態とは、美術品や文学作品などの文化財のような形で働く客体化された文化資本と、文化的体験によって振る舞いや教養として身につく身体化された文化資本であ

---

(3) この点、日本の文脈のもとでの文化資本を「キャッチアップ文化資本」としてとらえる大前（2002）の検討は理にかなっている。

る。分析の結果、中 3 時成績には身体化された芸術文化資本が、高校ランクには身体化・客体化された芸術文化資本が正の効果を持つことが示された。またこれらの文化資本の効果は中 3 時成績と高校ランクのそれぞれに吸収され、最終学歴には女性でのみ直接効果がみられた。これらのことから、日本では客体化された文化資本は高校進学の際に家庭訪問などを通じて生徒の家庭背景を把握する手段になる（承認）のに対し、身体化された文化資本は学習行動を促すことで学業達成へと結びつく間接的な役割を果たしている（社会化）と解釈されている。しかしこの研究は効果をもたらす文化資本の形態からそのメカニズムを類推するという間接的なアプローチに留まっている。他方で、荒牧（2011）は高校生に対する調査から、高校ランクや学校内成績をコントロールしても文化資本量によって教育アスピレーションが異なるが、それは親の教育期待を反映したものであることを示した。これは、それまで文化資本が教育アスピレーションに与える直接効果として報告されてきたものが実は親の教育期待の効果であることを示唆している。いずれにせよ、これらのように日本社会の文脈を踏まえたうえで文化資本が働くメカニズムを検討した例は少なく、そのアプローチも限定的である。

2-2　推薦入試等の性格と位置

さらに重要なのは日本の選抜制度の変容である。特に高等教育入学者選抜では、従来支配的であった一般入試のような画一化・標準化度合いの高い選抜方法だけでなく、推薦入試等の多様な選抜方法が普及してきた。

2015 年度の文科省『大学入学者選抜実施要項』によれば、推薦入試等の選抜は、調査書・推薦書・志願者本人の記載する資料等を用いて総合的な評価を行うものであり、特に「スポーツ・文化活動やボランティア活動などの諸活動、海外留学等の多様な経験や特定の分野において卓越した能力を有する者」を評価することが望ましいとされ、基本的に一般入試のような学力筆記試験のみで合否を判定しない点で共通している。AO 入試は「詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、入学志願者の能力・適性や学修に対する意欲、目的意識等を総合的に判定する入試方法」と定義されている。そこでは「大学教育を受けるために必要な基礎学力」の把握措置を講じるとしながらも、「知識・技能の修得状況に過度に重点を置いた選抜基準としない」とされている（文科省 2014）。実際、2014 年度の文科省の調べによれば、AO 入試で面接を利用する大学は全体の 92.9％で、そのほかには口頭試問（39.4％）や事前課題（37.2％）、小論文（36.2％）などを採用する大学が多いのに対し、一般入試のような学力検査を合否判定に用いる大学は全体の 5.4％に過ぎない。推薦入試は「原則として学力検査を免除し、調査書を主な資料

として判定する入試方法」とされており[4]、高校の評定を含む調査書と推薦書に加え、AO 入試で用いられる学力把握措置をもって入学させるものとされる。しかし推薦入試でも選抜に使用される方法は面接（90.6%）が圧倒的に多く、小論文が 7 割弱、高校評定が 5 割弱なのに対し一般入試のような学力検査は 3 割未満でこの数は口頭試問より少ない。また両入試とも学力把握措置としてセンター試験を課すものは 5% 前後である（文科省 2016）。このように、推薦入試等の多様な選抜は一般入試に比べて標準化度合いが低く、基準も曖昧になりやすい形式であると理解できる。

推薦入試等についてはその実態に比べて研究の蓄積が少なく、入試多様化の実態や、入試方法と入学後の学業成績や進学意識との関連を検討したものはあるが、特定の選抜方法を利用する側の文化資本や経歴に着目したものはほとんどない。数少ない例として、中澤（2002）は高校生に対する調査から、普通科進学校や職業学科において役職の経験や各種活動での受賞経験が多い生徒ほど推薦入試を利用しやすいことを明らかにした。しかしそれらが文化資本と関わりのあるものなのかは検討の余地がある。また中村（2011）は推薦入試の制度上の位置について体系的に分析を行い、推薦入試が一般入試に比べて学力下位の非エリート層に多く利用され、学習時間や合格率、受験勉強の負担感といった面で軽量化された選抜であることを明らかにした。苅谷（2002）も推薦入試希望者が一般入試希望者よりも学習時間が少ないことを明らかにしている。高等教育の大衆化のために普及した推薦入試のこのような性格を中村は「マス選抜」と呼んだ。しかしそこでは選抜に密輸される可能性のある文化資本の影響は検討されなかった。さらに、AO 入試については同様の研究はみあたらない。

2-3　仮説

以上の議論からわかるように、日本の文化資本研究では文化資本と教育達成の関連が部分的に示されているが、制度的文脈が十分に考慮されてきたとはいえず、日本の選抜システムの中で文化資本がどのような意味を持つのかがはっきりしない。本稿はこの問題に高等教育入学者選抜の面から対処する。これまですでに学歴の格差にとって重要な分水嶺となる高等教育への進学において入学者選抜の多様化が進んでいたにもかかわらず、そうした選抜制度の変化を加味した検討はなされていない。また、これまでは推薦入試の位置も

---

[4] ただし、「原則として学力検査を免除し」という文言は 2021 年度版の『大学入学者選抜実施要項』から削除されている。本稿のデータが対象とするのは 2012 年時点で高校 2 年生の生徒であるため、ここでは当時（2015 年度）のものを参照している。『大学入学者選抜に関する資料』も 2014 年度時点（すなわち 2012 年時点で高校 2 年生である者が進路選択を行う頃）の調査である。

一般入試との対比でしか捉えられていない。推薦入試が一般入試に比べ学力面で軽量化されたマス選抜であるとすれば、進学しない層との差も問題になる。推薦入試等の利用に対する文化資本の影響を検討するには、社会的資源の面からすでに有利になっている進学層だけでなく非進学層も含めて分析する必要があろう。これらを踏まえ、本稿では日本の高校生において、学力を一定にコントロールしたうえで「非進学」「推薦入試等で進学」「一般入試で進学」の 3 つの進路希望の差を分析する。

2.2 でみたように、推薦入試等は一般入試のような学力一斉筆記試験のみによらない標準化度合いの低い選抜であった。このような本人の経歴や「個性」を測る選抜方法の拡大に伴って、文化資本や習い事といった筆記試験で測られる学力以外の要因が進路選択にも影響するようになったのだろうか。推薦入試等の選抜の形式上、筆記試験の得点としての学力以外の要因が入り込みやすいことは受験者にとっても容易に想定できる。そのため学力筆記試験以外の面で自らの「能力」が有利になると想定し、結果として文化資本が豊かな者や文化・スポーツ・留学・資格などの経歴が優れている者が推薦入試を利用しやすいという可能性はある。

仮説 a：学力を統制した場合、文化資本の豊かな生徒ほど非進学や一般入試よりも推薦入試等を選択しやすい

他方で、これまでみてきたように文化資本の効果が部分的であったことや、標準化された試験本位の日本の選抜システムの特徴を踏まえると、受験者の進路もあくまで学力によって振り分けられており、それ以外の「能力」は進路希望の形成に意味を持たないか、持ったとしても文化資本がそこに関わっていない可能性もある。その場合、必ずしも文化資本を多く持つ者が推薦入試等の選抜を利用しやすいとはいえない。

仮説 b：学力を統制した場合、文化資本は推薦入試等の利用には関連しない

以上をもとに、日本の高等教育進学における推薦入試等の利用に文化資本の果たす役割を検討する。

3　データと方法

3-1　データ

本稿で用いるデータは 2012 年の 11 ～ 12 月に行われた「高校生と母親調査 2012」の個票データである[5]。この調査は全日制本科に在籍する高校 2 年生とその母親のペア 1070 組に対し郵送法で行われた全国調査であり（回収率 68.6%）、近年の実証研究の動向を踏まえて社会階層と教育に関する項目を豊富に含んでいる。たとえば中 3 時成績や高校ランクだけでなく、一般入試・推薦入試・AO 入試といった利用する入試方法、さらに文化資本に関する多彩な項目が盛り込まれており、本稿の分析に適している。また、ペア調査で母親にも直接回答を求めているため、高校生本人が回答するには必ずしも十分に把握できない親の職業や学歴、世帯収入など家庭背景に関する項目について正確な回答が期待できる。

3-2　従属変数

次に、分析に用いる変数の説明を行う。従属変数は進路希望と利用予定の入試方法を考慮してⅰ）非進学、ⅱ）推薦入試等で進学、ⅲ）一般入試で進学の 3 カテゴリーとした。具体的には、進路希望で就職を希望した者をⅰ）非進学とし、進学を希望した者には「専門学校、短大、大学にはどのようにして進学しようと考えていますか」という質問に一般入試、推薦入試、AO 入試、指定校推薦、附属高校からの進学、その他の中から多重式で回答を求めたうえで、そのうち一般入試の利用にかかわらず推薦・AO・指定校推薦のいずれかを選択した者をⅱ）、一般入試のみを選択した者をⅲ）とした。これらをもとに多項ロジスティック回帰分析を行う。対象者が高校生のため、本稿で用いる指標はあくまで利用予定の入試方法であり、高校生がその後実際にその入試を利用したかまではわからない。この点は本稿の限界であるが、中村（2011: 154-5）の分析によれば、大学進学アスピレーションは高校 2 年の夏の時点でその後とほとんど変わらないため、高校 2 年の冬時点の本調査における進路選択も実際とほとんど違わないとみてよいだろう。

なお、本稿で用いるのは選抜の結果ではないため、文化資本が実際に選抜で評価されているかまでは厳密には論じられない。しかし、どのような社会的資源を持った者がどのような選抜を利用するのかを把握することで、選抜システム全体の中での推薦入試等の位置

---

[5] 二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから〔「高校生と母親調査，2012」（2012 年高校生と母親調査研究会）〕の個票データの提供を受けました。

づけを明確にすることができる。また、そうした制度の変容が学歴や階層の形成にとってどのような意味を持つのかも明らかになるだろう。

3-3　独立変数

独立変数である文化資本は、先行研究に従って芸術文化資本と読書文化資本の 2 種類に関連する計 6 つの指標を用いる。まず身体化された文化資本に相当するものとして、子どもが小学生の頃に母親が子どもに行った文化活動（「ミュージカルやクラシックコンサートにつれていってあげる」「本を読んであげる」「本を買ってあげる」）の頻度をとりあげる。これらはすべて「いつもしていた」「よくしていた」「時々していた」「ほとんどしていなかった」「まったくしていなかった」の 5 点尺度で尋ねられている。本稿では芸術文化資本として（1）「ミュージカルやクラシックコンサートにつれていってあげる」を、読書文化資本として（2）「本を読んであげる」（3）「本を買ってあげる」を用いる。また所有する文化財として、代表的な指標である（4）蔵書数を読書文化資本として、（5）詩集、（6）美術品を芸術文化資本として投入する。蔵書数は 10 冊以下 = 5、11 ～ 25 冊 = 18、26 ～ 100 冊 = 63、101 ～ 200 冊 = 150.5、201 ～ 500 冊 = 350.5、501 冊以上 = 501 としたものを標準化した値、それ以外の財は所有する = 1、所有しない = 0 とした。

また文化資本と関連して、学校外教育活動も教育達成の不平等を説明するものとして考えられてきた（Broh 2002; Guest and Schneider 2003; Lareau 2003; Kaufman and Gabler 2004; Dumais 2006b; Covay and Carbonaro 2010）。本稿ではこれに過去に経験した習い事（英会話、楽器の習い事、スポーツの習い事、バレエ、ダンス、武道の習い事、ボーイスカウト・ガールスカウト、書道・習字、そろばん、茶道・華道・舞踊・陶芸）を用いる。これは学校の正規カリキュラム以外に主として家庭で親から行われる私的な教育投資であり、その意味で階層的不平等が反映されやすい。特に文化資本と親和的な、文化やスポーツに関わる幅広い種類の習い事は文化資本を身体化したり（片岡 1997; 荒牧 2008）、経歴の面で有利になったりすることによって推薦入試のような選抜の利用につながると考えることができる（中澤 2002）。もちろん習い事の種類によっても効果に差はあるだろうが、ここではそのすべてについて検討するよりも習い事を多く経験できることの効果に重きを置き、単純に合計数とした。

表１　使用する変数の記述統計量

	男性（N=353）				女性（N=342）			
	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
選抜方法別の進路希望								
非進学	19.0%				10.2%			
推薦入試等で進学	39.7%				53.8%			
一般入試で進学	41.4%				36.0%			
きょうだい数	2.42	0.75	1	5	2.33	0.71	1	6
父職								
サービス・マニュアル	31.7%				37.7%			
事務・販売	28.9%				25.1%			
専門・管理	39.4%				37.1%			
親学歴								
両親とも高校以下	22.7%				19.9%			
いずれかが高等教育卒	30.6%				36.5%			
両親とも高等教育卒	46.7%				43.6%			
世帯年収	0.07	0.97	-1.88	5.48	0.08	0.93	-1.88	4.48
塾・予備校・通信教育経験	0.83	0.37	0	1	0.84	0.37	0	1
芸術文化資本								
ミュージカルやクラシックコンサート	1.84	0.90	1	5	2.15	0.97	1	5
詩集	0.26	0.44	0	1	0.25	0.43	0	1
美術品	0.29	0.46	0	1	0.32	0.47	0	1
読書文化資本								
本を読んであげる	3.15	1.04	1	5	3.22	0.97	1	5
本を買ってあげる	3.42	0.80	1	5	3.48	0.82	1	5
蔵書数	0.00	1.01	-0.82	3.30	-0.03	0.95	-0.82	3.30
習い事経験	1.64	1.16	0	6	2.31	1.30	0	8
中3時成績	3.45	1.18	1	5	3.51	1.09	1	5
高校タイプ					2.05			
専門学科	25.2%				22.5%			
普通科C（偏差値51.0から35.0）	20.4%				23.4%			
普通科B（偏差値60.0から51.2）	27.8%				28.1%			
普通科A（偏差値78.0から60.3）	26.6%				26.0%			
高校内成績	3.10	1.20	1	5	3.11	1.18	1	5

3-4　統制変数

その他に統制変数として、きょうだい数、親の職業、親の学歴、世帯年収、塾・予備校・通信教育経験のほかに、学力として中３時成績および高校ランク、高２時成績を用いた。きょうだい数は連続変数としてそのまま用いた。親の職業は父親の職業をサービス・マニュアル職、事務・販売職、専門・管理職に３分類した。学歴は高校以下（中学・高校）と高等教育以上（専門・短大・大学・大学院）を基準に、父母ともに高校以下、いずれかが高等教育卒、父母ともに高等教育卒の３つに分類して使用した。世帯年収はできる限り高校生の出身階層に近い状態を捉えるため３年前の世帯年収を用い、25 万円未満＝ 12.5、50 万円くらい＝ 50、……、2300 万円以上＝ 2300 のように割り振り、標準化した得点を用いた。また、塾・予備校・通信教育は経験したことのある場合を 1、ない場合を 0 とするダミー

変数として投入した。中 3 時成績および高 2 時成績はともに「上」= 5 から「下」= 1 までの 5 点尺度の自己評価を、高校タイプは学科と偏差値によって普通科 A（偏差値 78.0 から 60.3）、普通科 B（偏差値 60.0 から 51.2）、普通科 C（偏差値 51.0 から 35.0）、専門学科の 4 カテゴリーを用いる。以上の変数の記述統計量を表 1 に示す。

4　結果

表 2 は選抜方法別の進路希望を従属変数とする多項ロジスティック回帰分析の結果である。先行研究にもあったように、性別による文化資本の効果の違いが予想されるため、男女別に分析を行った。モデル 1 はきょうだい数、父職、親学歴、世帯年収、塾・予備校・通信教育経験で予測したモデルであり、モデル 2 で文化資本および習い事を投入している。

これをみると、芸術文化資本や読書文化資本のほとんどの変数で有意な効果がみられないことがわかる。唯一有意になっている男性の蔵書数も、蔵書数が多いほど一般入試で進学しやすいという関係にあり、文化資本の豊かな者ほど推薦入試等を利用しやすいとはいえない（**仮説 b の支持**）。蔵書数が推薦入試等よりも一般入試の利用に正の効果をもつということからは、むしろ学力筆記試験本位の一般入試の利用に読書文化資本が関わっている可能性も推察される。家庭に本が多くある環境にあれば、知識や教養、言語能力の面で秀で、それが活かせそうな一般入試を利用しやすくなると考えることもできる。しかし、本を読んでもらう・本を買ってもらうといった他の変数が関連していないこと、女性においては読書文化資本の変数がどれも有意でないことも踏まえると、そうしたメカニズムを強く支持するには至らない。習い事についても男女ともに有意な効果はみられなかった。海外の先行研究ではスポーツ・ダンス・楽器など様々な習い事が教育達成に有利に働くことが報告されてきたが、本稿の結果からは、少なくとも日本の推薦入試等の利用に大きな影響は確認できない。

また、注目すべきは非進学層との差についても文化資本の効果がみられないことである。先行研究では、文化資本が豊かであるほど教育達成の面で有利になるという結果が示されていた。それに従えば、高等教育に進学を希望するか否かでも文化資本量に差があるはずだが、本稿の分析結果からはそうした差はみられない。進学しない者と推薦入試等を利用する者との間でどの文化資本項目も有意でない。基準カテゴリーを非進学にして比較的学力の高い一般入試利用者との差を分析しても有意な差は確認できなかった。このことは日本において進学に対する文化資本の寄与がそれほど明瞭でないことを示唆している。

このように、利用する選抜方法・進路希望に文化資本や習い事の関わる余地はほとんど

表２　選抜方法別の進路希望を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果

	男性						女性					
一般入試で進学（ref. 推薦入試等で進学）	モデル1		モデル2		モデル3		モデル1		モデル2		モデル3	
	Coef.	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*
切片	0.27	0.63	0.09	0.90	1.29	1.23	-1.25*	0.62	0.04	0.95	1.25	1.31
きょうだい数	-0.47**	0.18	-0.44*	0.18	-0.37	0.21	-0.06	0.18	-0.09	0.18	-0.19	0.21
父職（ref. サービス・マニュアル）												
事務・販売	0.26	0.35	0.26	0.36	0.40	0.43	-0.45	0.34	-0.51	0.35	-0.56	0.39
専門・管理	-0.05	0.35	-0.12	0.36	-0.13	0.44	0.22	0.32	0.17	0.33	0.03	0.38
親学歴（ref. 両親とも高校以下）												
いずれかが高等教育卒	0.41	0.38	0.37	0.39	0.31	0.48	0.43	0.38	0.35	0.39	0.17	0.43
両親とも高等教育卒	0.54	0.38	0.41	0.39	-0.23	0.48	0.73	0.39	0.58	0.41	0.27	0.45
世帯年収	0.34*	0.14	0.35*	0.15	0.28	0.18	0.22	0.14	0.21	0.15	0.13	0.17
塾・予備校・通信教育	0.40	0.38	0.37	0.40	0.27	0.47	0.53	0.36	0.54	0.37	0.13	0.42
芸術文化資本												
ミュージカルやクラシックコンサート			-0.04	0.15	-0.05	0.18			0.03	0.14	-0.01	0.16
詩集			0.00	0.32	0.25	0.36			0.31	0.30	0.25	0.34
美術品			-0.35	0.30	-0.14	0.35			0.31	0.29	0.24	0.33
読書文化資本												
本を読んであげる			0.15	0.14	-0.03	0.16			-0.15	0.14	-0.09	0.16
本を買ってあげる			-0.06	0.18	-0.01	0.20			-0.24	0.16	-0.37	0.19
蔵書数			0.40**	0.14	0.43*	0.17			0.04	0.15	0.12	0.17
習い事経験			0.07	0.11	0.00	0.14			-0.00	0.10	-0.11	0.12
中3時成績					0.42**	0.16					0.48**	0.17
高校タイプ（ref. 普通科A）												
専門学科					-3.48***	0.81					-2.32***	0.53
普通科C（偏差値51.0から35.0）					-1.55***	0.44					-1.86***	0.45
普通科B（偏差値60.0から51.2）					-0.37	0.36					-1.25***	0.35
高校内成績					-0.41**	0.14					-0.10	0.13

非進学（ref. 推薦入試等で進学）	モデル1		モデル2		モデル3		モデル1		モデル2		モデル3	
	Coef.	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*	*Coef.*	*S.E.*
切片	0.06	0.68	0.10	1.12	-14.76***	1.14	-2.21**	0.82	-1.39	1.52	-14.99***	1.39
きょうだい数	0.24	0.20	0.27	0.21	0.36	0.25	0.63*	0.26	0.63*	0.27	0.77*	0.31
父職（ref. サービス・マニュアル）												
事務・販売	-0.63	0.42	-0.60	0.43	-0.47	0.48	-0.43	0.48	-0.46	0.50	0.02	0.57
専門・管理	-0.56	0.43	-0.55	0.44	-0.25	0.50	-1.03	0.64	-1.03	0.66	-0.75	0.69
親学歴（ref. 両親とも高校以下）												
いずれかが高等教育卒	-0.44	0.38	-0.42	0.39	-0.31	0.45	-0.28	0.45	-0.26	0.46	-0.52	0.53
両親とも高等教育卒	-1.13*	0.45	-1.12*	0.48	-0.47	0.56	-0.89	0.59	-0.98	0.60	-1.11	0.67
世帯年収	-0.46*	0.23	-0.42	0.24	-0.49	0.26	-0.43	0.30	-0.37	0.31	-0.39	0.34
塾・予備校・通信教育	-0.90*	0.38	-0.72	0.40	-1.02*	0.47	-0.53	0.44	-0.44	0.46	-0.21	0.49
芸術文化資本												
ミュージカルやクラシックコンサート			-0.01	0.24	0.05	0.28			-0.21	0.26	-0.16	0.29
詩集			0.38	0.47	0.24	0.55			-0.94	0.67	-0.99	0.76
美術品			-0.12	0.44	-0.14	0.53			0.49	0.52	0.57	0.58
読書文化資本												
本を読んであげる			0.00	0.19	0.06	0.23			-0.23	0.24	-0.23	0.27
本を買ってあげる			0.01	0.23	-0.12	0.27			0.15	0.27	0.06	0.31
蔵書数			-0.02	0.23	0.11	0.27			0.25	0.29	0.37	0.30
習い事経験			-0.24	0.17	-0.21	0.18			-0.11	0.17	-0.07	0.19
中3時成績					0.02	0.20					-0.43	0.26
高校タイプ（ref. 普通科A）												
専門学科					16.88***	0.46					14.98***	0.54
普通科C（偏差値51.0から35.0）					15.10***	0.47					13.29***	0.58
普通科B（偏差値60.0から51.2）					14.68***	0.57					13.88***	0.69
高校内成績					-0.36*	0.17					0.12	0.20
AIC	681.3		692.8		558.4		616.1		631.5		548.4	
BIC	743.1		808.8		713.0		677.4		746.6		701.8	
Log Likelihood	-324.6		-316.4		-239.2		-292.0		-285.8		-234.2	
McFadden擬似決定係数	0.122		0.144		0.353		0.086		0.106		0.267	
N			353						342			

注）***: $p < 0.001$, **: $p < 0.01$, *: $p < 0.05$

ない。むしろこの結果からわかるのは、選抜形式からして文化資本が働くと想定されていた推薦入試等の選抜の利用も学力による序列づけによって水路づけられているに過ぎないということである。モデル 3 をみると、男女ともに学力要因が明確な効果を持っている[6]。高校が専門学科よりも普通科、普通科のなかでも偏差値の高い高校であるほど一般入試を利用しやすい。その差はかなり大きく、普通科 A に対し専門学科の場合には少なくとも 10 倍以上（*e^2.32=10.1*、女性）、普通科 C の場合には約 4.7 倍以上（*e^1.55=4.7*、男性）のオッズ比で推薦入試を利用しやすい。非進学との差を規定しているのも、男性では親学歴や塾・予備校・通信教育経験、女性ではきょうだい数とともにやはり学力の差が大きい。また男性ではいったん高校に進学すれば高校内成績が高いほど推薦入試を利用しやすい傾向がみられるが、これは推薦入試が学校内で一定の学業成績を必要とすることからくるものと思われる。これらは中村（2011: 139）の結果を裏づけるものである。

以上のように、日本の制度的文脈のもとでは、高等教育進学において学力が高いほど非進学よりも推薦入試等を、推薦入試等よりも一般入試を利用しやすいのであって、文化資本や習い事が推薦入試等の選抜の利用に関連しているようすはみられない。

5　結論と議論

本稿では、これまでの日本の文化資本の実証研究が文化資本と学力や学歴との相関を指摘しながらもその文脈を十分に考慮してこなかったことから、日本の選抜システムにおける文化資本を再検討することを目的とした。そのなかで高等教育の入学者選抜制度の変容に焦点を当て、中村（2011）で検討された出身階層の条件を越えて、文化資本が推薦入試等の多様な選抜の利用に与える影響を分析してきた。

その結果、芸術文化資本・読書文化資本およびその他の文化財からなる様々な文化資本指標と推薦入試等の選抜の利用との間には有意な関連はみられないことを明らかにした。推薦入試等の性格や先行研究の指摘によれば、文化資本やそれに関連するとみられる習い事が関わっていると予想されたが、こうした仮説は支持されなかった。代わりに中 3 時成績や高校ランクといった学力要因が大きな影響を与えており、恵まれた社会経済的条件にある者や高い学力を有する者が非進学よりも推薦入試等、推薦入試等よりも一般入試を利

---

[6] 推薦入試等は比較的少数ではあるが入試難易度の高い大学にも採用されおり、学力によって文化資本の効果が異なることも予想されるため、高校ランクと文化資本の交互作用項を投入したモデルでも推定した。詩集や美術品で一部の項目のみ有意な効果を示したが、いずれも推薦入試等を利用する者が文化資本を多く保有するという結果はみられず、推薦入試等よりも一般入試を利用しやすいという主効果と同様の傾向であったため分析からは除外した。

用しやすくなっていた。また非進学層との差にも文化資本の効果はみられなかった。こうした結果から文化資本が選抜に密輸されていないと断定することはできないが、従来の研究が一括りに「文化資本→学歴」として扱ってきた効果を、選抜方法の視点を導入することでより制度的文脈に踏み込んだ解釈として提供し、進路選択に文化的要因が大きな役割を果たしていないことを示した。

本稿の知見は従来の問題にさらに 2 つの示唆をもたらすと考える。1 つは、文化資本概念の濫用・独り歩きの抑止である。文化資本はもともと関係的概念であって特定の実体を指すものではない（Bourdieu 1979=1990）。すなわちある場（学業成績の評価、教育選抜、雇用など）において評価され、物質的・象徴的に効果的なものとして機能する文化が文化資本といわれるのである（Bourdieu 1977）。したがって場が違えば評価され資本となる文化も異なるのであり、文化の側だけで文化資本を論じられるわけではない。もちろん操作的には特定の指標（これまでの例ではミュージカルやクラシックコンサート、美術館・博物館に行く頻度、および本や文化財の所有など）を用いることになるが、重要なのはそれらの指標と関連する指標との統計的関係の意味を解釈することである。そしてその意味を解釈するためには、教育選抜でいえば学校教育システムに対する理解が不可欠である。代表的な「文化資本」の指標と教育上の成功との関連をもって文化資本の承認としていた従来の（特に日本の）多くの文化資本の実証研究のように、場＝制度的文脈を無視して同一の指標をいつでもどこでも通用するかのように考えるのは誤りである。この点を踏まえ、本稿では日本の高等教育入学者選抜という文脈に着目し、従来とは異なる視点から文化資本や習い事経験の効果を検討した。その結果からは、少なくとも文化への親しみや習い事経験が推薦入試等の利用を促している形跡は確認できなかった。逆にいえば、本稿で検討しなかった文化が資本になる可能性は否めないが、それは今後正しい文化資本概念の理解に基づく調査と研究が行われていくことによって明らかになるだろう。

もう 1 つは、メリトクラシーと選抜システム研究への発展可能性である。文化資本が文化の側だけでなく場によっても規定されているということは、選抜システムの在り方によって社会的不平等の現れ方が異なるということである。より一般的にいえば、文化資本に限らず能力そのものが選抜システムの生成物である。認められる能力が違えば、「学歴」や「能力」（そしてメリトクラシー）の意味も変わってくるだろう。それらの違いが今度はその社会における平等や不平等を定義するのである。またアスピレーションも選抜システムのもとで加熱・冷却される。文化資本が推薦入試等の利用に関連せず、主として標準的な学力によって進路選択が水路づけられるという本稿の結果は、標準的な学力をエリート的な能力として一元化する日本の学校教育・選抜システムが健在であることを示唆して

いる。そのもとでは、推薦入試等の学力筆記試験によらない選抜の普及という制度変更も進学の難しい学力下位層の生徒を進学させる手段となる（中村 2011）。こうした形での大衆の包摂はアスピレーションの形成にどのような影響を及ぼすだろうか。本稿の結果は、選抜システムの国や時代の比較によってメリトクラシーやそれに基づくアスピレーションの違いを構造的に分析するための視座につなげられる可能性もある。

このように日本の選抜システムの特徴を明らかにしてきたが、本稿には主に方法上の面で限界もある。今回用いたデータはあくまで利用予定の選抜方法であることを考えると、文化資本が選抜に用いられているかどうかまではわからない。本田（2005）は、90 年代頃から従来のような基礎学力に加えて多様性・柔軟性のある全人格的能力が重視されるようになった事態を「ハイパー・メリトクラシー」と呼び、そこにさらなる階層的不平等が入り込むことを危惧していたが、本稿の結果からは高校生のアスピレーションが文化的な要因に規定される余地はかなり小さいということになる。いずれにせよ、この点は利用した選抜方法やその結果も含めたデータによってさらなる検証が必要であろう。

また、今回の分析では推薦入試等の多様な選抜の中の差異を無視して、公募制推薦・指定校推薦・AO 入試を標準化度合いの低い選抜として一括して扱っている。もちろん推薦入試と AO 入試で選抜方法に違いはあるし、推薦入試については一部の有名私立大学において一般入試と同様の学力試験を重視する大学もある（次橋 2019）ため、それが本稿の分析結果に影響を与えている可能性もある。しかし、2-2 で検討したようにその多くが標準的な学力試験を行わず多様な方法で選抜するという点ではそれらは共通している。それゆえ本稿では一般入試のような伝統的な学力筆記試験のみによる選抜と、それ以外の選抜という類型で論じてきたのである。もっとも、それを越えて多様な選抜方法の差異を確認するには、進学先の大学、利用する選抜方法の詳細に関する項目を含めたよりサンプル・サイズの大きいデータの蓄積が不可欠である。

こうした点以外にも、文化資本の効果を検証するという意味では、片瀬（2005）のように学習態度の変数を媒介にしたメカニズムの分析や苅谷（2001, 2008）の努力の階層差仮説との接合、パネルデータなど時系列データを用いて観察されない異質性を統制した研究（Jæger 2011; 中澤 2012）も有効だろう。今回検討しなかった高校までの過程も含め、その社会ごとの文脈を踏まえて文化資本が作動するメカニズムを解明していくことが今後の重要な課題である。

参考文献

Andersen, Ida G. and Mads M. Jæger, 2015, Cultural Capital in Context: Heterogeneous Returns to Cultural Capital across Schooling Environments, *Social Science Research*, 50: 177-88.

荒牧草平, 2008,「教育熱心の過剰と学校不信」朝日新聞社共同調査・東京大学共同研究『学校教育に対する保護者の意識調査』, 94-105.

———, 2011,「高校生の教育期待形成における文化資本と親の期待の効果――「文化資本」概念解体の提案」『九州大学大学院教育学研究紀要』(14): 97-109.

Bourdieu, Pierre, 1977, "Cultural Reproduction and Social Reproduction," Jerome Karabel and Albert H. Halsey eds., *Power and Ideology in Education*, Oxford University Press, 487-511.

———, 1979, *La Distinction: Critique sociale du jugement*, Éditions de Minuit.（石井洋二郎訳, 1990,『ディスタンクシオンⅠ・Ⅱ』藤原書店.）

Bourdieu, Pierre and Jean-Claude Passeron, 1970, *La Reproduction*, Éditions de Minuit.（宮島喬訳, 1991,『再生産』藤原書店.）

Bourdieu, Pierre and Loïc J. D. Wacquant, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, Cambridge: Polity Press.（水島和則訳, 2007,『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店.）

Broh, Beckett A., 2002, "Linking Extracurricular Programming to Academic Achievement: Who Benefits and Why?," *Sociology of Education*, 75（1): 69-95.

Buchmann, Claudia, 2002, "Getting Ahead in Kenya: Social Capital, Shadow Education, and Achievement." Fuller, B and Hannum, E. eds, *Schooling and Social Capital in Diverse Cultures*, Oxford: Elsevier Science Ltd, 133-59.

Byun, Soo-yong, Evan Schofer and Kyung-keun, Kim, 2012, "Revisiting the Role of Cultural Capital in East Asian Educational Systems: The Case of South Korea," *Sociology of Education*, 85: 219-39.

Covay, Elizabeth and William Carbonaro, 2010, "After the Bell: Participation in Extracurricular Activities, Classroom Behavior, and Academic Achievement," *Sociology of Education*, 83: 20-45.

Crook, Christopher, 1997, *Cultural Practices and Socioeconomic Attainment: The Australian Experience*, Westport, Conn.: Greenwood.

De Graaf, Paul M., 1986, "The Impact of Financial and Cultural Resources on Educational Attainment in the Netherlands," *Sociology of Education*, 59: 237-46.

———, 1988, "Parents' Financial and Cultural Resources, Grades, and Transitions to Secondary School in the Federal Republic of Germany," *European Sociological Review*, 4: 209-21.

De Graaf, Nan D., Paul M. De Graaf and Gerbert Kraaykamp,2000, "Parental Cultural Capital and Educational Attainment in the Netherlands: A Refinement of the Cultural Capital Perspective," *Sociology of Education*, 73（2): 92-111.

DiMaggio, Paul, 1982, "Cultural Capital and School Success: The Impact of Status Culture Participation on the Grades of U. S. High School Students," *American Sociological Review*, 47（2): 189-201.

Dumais, Susan A., 2002, "Cultural Capital, Gender, and School Success: The Role of Habitus," *Sociology of Education,* 75: 44-68.

———, 2006a, "Early Childhood Cultural Capital, Parental Habitus, and Teachers' Perceptions," *Poetics,* 34: 83-107.

———, 2006b, "Elementary School Students' Extracurricular Activities: The Effects of Participation on Achievement and Teachers' Evaluations." *Sociological Spectrum*, 26（2): 117-47.

Evans, Mariah D. R., Jonathan Kelley and Joanna Sikora, 2014, "Scholarly Culture and Academic Performance in 42 Nations," *Social Forces,* 92（4): 1573-605.

Farkas, George, 1996, *Human Capital or Cultural Capital?: Ethnicity and Poverty Groups in an Urban School District*, New York: Aldine de Gruyter.

Flere, Sergej, Marina Krajnc T., Rudi Klanjšek, Bojan Musil and Andrej Kirbiš, 2010, "Cultural Capital and Intellectual Ability as Predictors of Scholastic Achievement: A Study of Slovenian

Secondary School Students," *British Journal of Sociology of Education*, 31: 47-58.
藤田英典・宮島喬・秋永雄一・橋本健二・志水宏吉, 1987,「文化の階層性と文化的再生産」『東京大学教育学部紀要』27: 51-89.
藤田英典・宮島喬・加藤隆雄・吉原恵子・定松文, 1992,「文化の構造と再生産に関する実証的研究」、『東京大学教育学部紀要』32: 53-88.
Guest, Andrew and Barbara Schneider, 2003, "Adolescents' Extracurricular Participation in Context: The Mediating Effects of Schools, Communities, and Identity," *Sociology of Education*, 76 (2): 89-109.
橋本健二, 1989,「文化評価の構造と文化の階層性」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』24 (2): 151-66.
本田由紀, 2005,『多元化する「能力」と日本社会――ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT 出版.
磯直樹・竹之下弘久, 2018,「現代日本の文化資本と階級分化――1995 年 SSM データと 2015 年 SSM データの多重対応分析」石田淳編『2015 年 SSM 調査報告書 8 意識 I』2015 年 SSM 調査研究会, 17-37.
岩間暁子, 1998,「産業界と男性の文化――日本経済のサービス化と文化資本の構造」片岡栄美編『1995 年 SSM 調査シリーズ 18 文化と社会階層』1995 年 SSM 調査研究会, 113-32.
Jæger, Mads M., 2009, "Equal Access but Unequal Outcomes: Cultural Capital and Educational Choice in a Meritocratic Society," *Social Forces*, 87: 1943-71.
――――, 2011, "Does Cultural Capital Really Affect Academic Achievement? New Evidence from Combined Sibling and Panel Data," *Sociology of Education*, 84: 281-98.
Jæger, Mads M. and Richard Breen, 2016, "A Dynamic Model of Cultural Reproduction," *American Journal of Sociology*, 121 (4): 1079-115.
苅谷剛彦, 1995,『大衆教育社会のゆくえ』中央公論新社.
――――, 2001,『階層化日本と教育危機』有信堂高文社.
――――, 2002,『教育改革の幻想』筑摩書房.
――――, 2008,『学力と階層』朝日新聞出版.
片岡栄美, 1991,「文化的活動と社会階層――現代女性における文化的再生産過程」『関東学院大学文学部紀要』(62): 97-130.
――――, 1992,「社会階層と文化的再生産」『理論と方法』7 (2): 33-54.
――――, 1996,「階級のハビトウスとしての文化弁別力とその社会的構成――文化評価におけるディスタンクシオンの感覚」『理論と方法』11 (1): 1-20.
――――, 1997,「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」『家族社会学研究』(9): 23-38.
――――, 1998a,「家庭の文化環境と文化的再生産過程――正統文化と大衆文化」片岡栄美編『1995 年 SSM 調査シリーズ 18 文化と社会階層』1995 年 SSM 調査研究会, 45-66.
――――, 1998b,「文化の構造と文化消費者の社会的特性――文化活動の諸類型と社会的階層の対応関係を中心に」『1995 年 SSM 調査シリーズ 18 文化と社会階層』1995 年 SSM 調査研究会, 87-112.
――――, 1998c,「地位形成に及ぼす読書文化と芸術文化の効果――教育・職業・結婚における文化資本の転換効果と収益」『1995 年 SSM 調査シリーズ 18 文化と社会階層』1995 年 SSM 調査研究会, 171-91.
――――, 1998d,「文化弁別力と文化威信スコア―文化評価の構造と社会階層」片岡栄美編『1995 年 SSM 調査シリーズ 18 文化と社会階層』1995 年 SSM 調査研究会, 249-61.
――――, 1998e,「教育達成におけるメリトクラシーの構造と家族の教育戦略――文化投資効果と学校外教育投資効果の変容」近藤博之編『1995 年 SSM 調査シリーズ 10 教育と世代間移動』1995 年 SSM 調査研究会, 35-66.
――――, 2000,「文化的寛容性と象徴的境界――現代の文化資本と階層再生産」今田高俊編『日本の階層システム 5 ―社会階層のポストモダン』東京大学出版会, 181-220.
――――, 2001,「教育達成過程における家族の教育戦略――文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に」『教育学研究』68 (3): 259-73.
――――, 2008,「芸術文化消費と象徴資本の社会学――ブルデュー理論からみた日本文化の構造と特徴」『文化経済学』6 (1): 13-25.
片瀬一男, 2005,『夢の行方』東北大学出版会.
Katsillis, John and Richard Rubinson, 1990, "Cultural Capital, Student Achievement, and Educational

Reproduction: The Case of Greece," *American Sociological Review*, 55: 270-9.
Kaufman, Jason and Jay Gabler, 2004, "Cultural Capital and the Extracurricular Activities of Girls and Boys in the College Attainment Process." *Poetics,* 32:145-68.
吉川徹, 1996,「言語資本による文化的再生産――現代日本社会における説明力と適用範囲についての一考察」『ソシオロジ』41（1）: 35-49.
Lamont, Michele and Annette Lareau, 1988, "Cultural Capital: Allusions, Gaps and Glissandos in Recent Theoretical Developments," *Sociological Theory*, 6: 153-68.
Lareau, Annette, 2003, *Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life*, Los Angeles: University of California Press.
Lareau, Annette and Erin M. Horvat, 1999, "Moments of Social Inclusion and Exclusion: Race, Class, and Cultural Capital on Family-School Relationships," *Sociology of Education*, 72: 37-53.
松岡亮二・中室牧子・乾友彦, 2014,「縦断データを用いた文化資本相続過程の実証的検討」『教育社会学研究』95: 89-108.
宮島喬・田中佑子, 1984,「女子高校生の進学希望と家族的諸条件――「文化的」環境を中心として」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』5: 41-59.
文部科学省, 2014,『平成 27 年度大学入学者選抜実施要項』（2021 年 10 月 1 日取得 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2014/08/20/1351000_03.pdf）
――――, 2016,『大学入学者選抜に関する資料』（2021 年 10 月 1 日取得 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_04_2.pdf）
――――, 2021,『令和 2 年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要』（2021 年 10 月 1 日取得 https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/1414952_00002.htm）
中村高康, 2011,『大衆化とメリトクラシー』東京大学出版会.
中室牧子・藤原夏希・井口俊太朗, 2014,「「AO 入試」の再評価――慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）を事例に」『Keio SFC journal』14（1）: 178-97.
中西祐子, 2001,「文化資本を形成するもの――文化接触が文化の選好、鑑賞能力に与える影響について」『ソシオロジスト―武蔵大学武蔵社会学論集』3: 227-49.
中澤渉, 2002,「推薦入学制度は「成功」しているのか受験生の合理的選択仮説に基づく実証分析」『教育社会学研究』70: 203-23.
――――, 2012,「なぜパネル・データを分析するのが必要なのか――パネル・データ分析の特性の紹介」『理論と方法』27（1）: 23-40.
大前敦巳, 2002,「キャッチアップ文化資本による再生産戦略――日本型学歴社会における「文化的再生産」論の展開可能性」『教育社会学研究』70: 165-83.
Roscigno, Vincent J., and James W. Ainsworth-Darnell, 1999, "Race, Cultural Capital, and Educational Resources: Persistent Inequalities and Achievement Returns," *Sociology of Education*, 72: 158-78.
白倉幸男編, 1998,『1995 年 SSM 調査シリーズ 17 社会階層とライフスタイル』1995 年 SSM 調査研究会.
Sullivan, Alice, 2001, "Cultural Capital and Educational Attainment," *Sociology*, 35: 893-912.
竹内洋, [1991] 2015,『立志・苦学・出世』講談社.
多喜弘文, 2020,『学校教育と不平等の比較社会学』ミネルヴァ書房.
Treiman, Donald J., 1970, "Industrialization and Social Stratification," E. O. Laumann ed., *Social Stratification: Research and Theory for the 1970s*, Indianapolis: Bobbs Merrill Co, 207–34.
次橋秀樹, 2019,「大学推薦入試の展開と現状――現代における推薦入試の類型化試案」『京都大学大学院教育学研究科紀要』65: 331-43.
Van de Werfhorst, Herman G. and Saskia Hofstede, 2007, "Cultural Capital or Relative Risk Aversion? Two Mechanisms for Educational Inequality Compared," *British Journal of Sociology*, 58: 391-415.
Xu, Jun and Gillian Hampden-Thompson, 2012, "Cultural Reproduction, Cultural Mobility, Cultural Resources, or Trivial Effect? A Comparative Approach to Cultural Capital and Educational Performance," *Comparative Education Review*, 56: 98-124.
Yaish, Meir and Tally Katz-Gerro, 2012, "Disentangling 'Cultural Capital': The Consequences of Cultural and Economic Resources for Taste and Participation," *European Sociological Review*, 28: 169-85.

Yamamoto, Yoko and Mary C. Brinton, 2010, “Cultural Capital in the East Asian Educational Systems: The Case of Japan,” *Sociology of Education*, 83: 67-83.

（えんどう　ゆうた・修士課程）